

2017 年度 A セメスター：哲学Ⅱ(山本芳久)

試験対策プリント

文責¹：田邊

-目次-

はじめに.....	P2
試験情報.....	P2
『神学大全』の概説.....	P3
注意事項.....	P4
第一部：人間論	
第四十問題：怒情の諸情念について。そして、まずは希望と絶望について.....	P5
第二十六問題：OF THE PASSIONS OF THE SOUL IN PARTICULAR: AND FIRST, OF LOVE.....	P6
第二十七問題：愛の因について.....	P8
第二十八問題：愛の果について.....	P11
第二十九問題：憎しみについて.....	P13
第三十八問題：OF THE REMEDIES OF SORROW OR PAIN.....	P16
第二十五問題：OF THE ORDER OF THE PASSIONS TO ONE ANOTHER.....	P18
第六十四問題：(A) BY DEEDS OF MURDER.....	P20
第五十九問題：倫理徳と情念の関係について.....	P21
第七十七問題：感覚的欲求における罪の原因について.....	P25
第一部：神論	
第二十問題：神の愛について.....	P26
第三部：キリスト論	
第一問題：受肉の適合性について.....	P28

¹ 内容に自信がないので、申し訳ないが責任は取らない。

-はじめに-

本プリントは、2017年度A Semester開講：哲学Ⅱ(山本芳久先生)の試験対策プリントです。このシケプリは、『神学大全』講読箇所解説を、予備知識などを含めながら煩雑に綴っただけのものなので、授業で配布された原文と併用してください。また、記述内容の重要度によってフォントカラーを分けました。説明の本筋は黒、小話や本筋の理解補助となるものは灰色で表記しています。前日に慌てているそのあなたは、まあこのシケプリをちゃんと読めば正直何とかかなります。Sセメのフラ語はなんともなりませんでしたがね。

基本的に本授業はトマス＝アキナス『神学大全』の日本語訳と向き合い、様々な前提知識や語り口を手掛かりに、それを解釈していく形で進められました。本授業の最終目的は、「神学大全の授業講読箇所を理解すること」ではなく、「古典と向き合い、粘着質に読み込み、それを理解し、自分のものとする」という体験そのものにあります。単にトマスの理論を理解するのではなく、それを自分の体験や考えとつなげ、体系的な理解を図るのが良いと思います。故に試験では、講読箇所以外も出題されます。改めて、試験勉強の際には、原文を横に置きそれを自らの頭で解釈するサポートとして本シケプリを使用してくださいと思えます。その中で身につく原文解釈の作法が、試験では求められることは、山本さんがシケプリを持ち込み可にしたことから読み取れます。頑張りましょう。

田邊

-試験情報-

試験時間：90分

試験形式：論述形式。解答用紙はB4一枚。

持ち込み：紙媒体であれば持ち込み可(当初は教科書のみ持ち込み可であったが、後に規制が緩和された)

評価軸：①原文理解の正確さ ②それを踏まえた意見叙述の深さ

記述の量そのものは多くないが、丁寧さが求められる。原文を正確に理解した上で、それを自分なりに掘り下げるといった両側面を持った解答でなければ、高得点は望めない。各問に「～行以内」という指定があるため、少なすぎず適切な量で記述すること。

-『神学大全』の概説-

購読箇所の解釈に入る前に、『神学大全』というテキスト自体の基礎知識、およびそれを構成する各部について概説する。それが執筆された背景と内容の構成を見なければ、各部各項でなされるトマスの主張を構造的に捉えることはできない。人間論とキリスト論におけるトマスの書き方の相違²は象徴的である。

○『神学大全』とは

『神学大全』は、中世のスコラ哲学を代表する神学者・哲学者であるトマス＝アキナス(1225頃～1274)の主著である。本文でも度々引用されるが、アリストテレス哲学と、アウグスティヌス以来のキリスト教哲学を統合し、人間の理性に真理を求める形である種の統合されたキリスト教哲学を打ち立てたものである。本書は、第一部:神論、第二部:人間論、第三部:キリスト論の三部構成となっているが、未完である。

○構成

『神学大全』は、第一部「神論」・第二部「人間論」・第三部「キリスト論」で構成されている。授業で扱ったのは主に第二部の中の「情念」つまり人間の感情を扱った部分であり、授業後半では第一部や第三部も少し扱われた。本書の特徴は、上記の各部からさらに小さな“問題”に分割され、その問題がさらに“項”に分類されている点にあらう。新約聖書をベースとし、過去の哲学者の論を参考にしながらそれぞれの問いに答える形で論が進められるのである。

○叙述形式

各項の構造は定められている。以降の本文解釈で参考にされたい。

- ・”異論”：「けだし～」と始まり(1)(2)…と続く部分。項とされるそれぞれの問いに対して、トマスとは異なるがそれなりに説得力のある意見を紹介している。
- ・”反対異論”：「他面、～」と始まる部分。異論に対する形で、トマスに近い考え方が提示される。
- ・”主文”：「以上に答えて、～」と始まる部分。その項で提示される考え方や概念に対するトマス自身の考えが詳細に述べられる。
- ・”異論解答”：「(一)については、～」と始まる部分。異論を正している。

² P32 参照。

-注意事項-

- ・授業で扱った項において、重要な”異論”、”反対異論”、”主文”、”異論解答”を取り上げて解釈を進めていく形式をとる。
- ・授業プリントに書かれていない問題の名前はネットに掲載されていた英訳版となっておりますがご了承ください。
- ・『トウスクルム荘対談集』『神の国』『ニコマコス倫理学』『ルター神学討論集』など、授業で扱った『神学大全』以外の文献の解説に関しては本シケプリに記載しておりません。出ないかもしくは出てもほんのちょっとだと思ったからです³。とはいえそんなに難しくないなので、プリントを自分で読めば(最悪読まなくても)大丈夫だと思います。
- ・過去にラテン語の概念が問われたことがあるため、授業で扱ったラテン語はほとんど記載した。

³ あと、その部分は寝ていたからである。

第二部：人間論

第四十問題：怒情の諸情念について。そして、まずは希望と絶望について

【第一項：希望は欲望または欲と同じものか】

本項では、“希望”とは何でありいかにして欲と異なるのかが、その対象を明らかにすることによって論じられている。

➤ 主文

“情念”とは感情、“欲情”とは欲望、“怒情”とは気概のことである。希望の対象は、以下の4条件によって定義づけられる；

- (1)善である…価値があるということ。“恐れ”という感情は悪に関わるため、ここでは排除される。善には三種類ある(後述)が、ここではそのうちどれにも限定されていない(道徳的善に限定されない)。
- (2)未来のものである…現在の善に対して抱かれる感情は、“喜び”である。
- (3)獲得に困難が伴う…困難が伴わないものは、“欲望”であり、この点で希望と欲望とは異なる。
- (4)獲得が可能である…獲得不可能なものに抱く感情は“絶望”である。

上の4条件全てに当てはまるものが、希望の対象である。ただし、条件3については、他の感情を排斥するものではなく、希望は欲望のうちに含まれるということも表している。

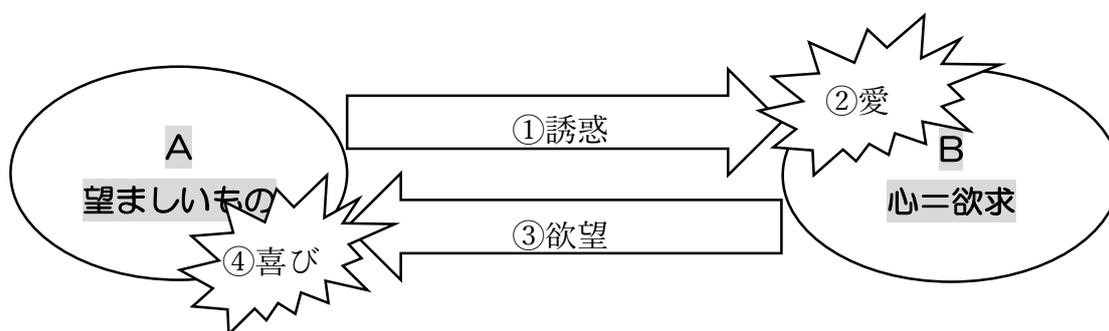
第二十六問題： OF THE PASSIONS OF THE SOUL IN PARTICULAR: AND FIRST, OF LOVE⁴

【第二項：愛は情念であるか】

本項では、愛が感情であるかを、その性質を明らかにすることを通して論じている。

▶ 主文

下図を参照されたい。「望ましいもの＝魅力的なもの」をA、「自分の心＝欲求」をBとおく。これらのAとBの関係の中で愛は定義されるものであり、この簡易図は後出の項でも使用する。



- ① A が B に働きかける(=誘惑?)
- ② B は A に揺り動かされ、好感を抱く(=愛)
- ③ B から A への運動(=欲望)が発生する
- ④ 最終的に運動が停止する(=手に入れる)と、喜びが生まれる

上図のように、愛→欲望→喜びという3つの感情がそれぞれ順に出現する。欲求されうるもの(A)が心(B)に働きかけることで、「いいな」と行った好感が生まれるが、これが“愛”である。そして、その心が欲求されうるものに対して働きかけることが“欲望”である。感情はある種の運動である。

愛を抱いているからこそ、それが出発点となって欲望が生まれる、この意味において“愛”は運動の出発点である。さらに、“愛”という感情は、自らの心の中から自発的・内発的に生まれ出てくるものと思いがちであるが、実は外界の魅力的なもの(A)によって心が受動的な形で揺り動かされることによって生まれてくるものなのである。トマス曰く、以上からして愛は、
(1)受動的な仕方で生まれる
(2)能動的な行為の原動力である
という2つの性格を有している。

⁴ この部分は、教科書でも詳しく論じられている箇所なのでそちらを参照しても良い。

➤ **異論 1 とその異論解答**

愛は「ちから」であり情念ではないというディオニシウスの見解が述べられている。しかし、この見解は主文の解説で挙げた愛の二つの性格のうち片方しか見ていないと、トマスは主張する。この異論自体を否定するのではなく⁵、能動的な行為の原動力という面のみを見れば「ちから」ということができると認めた上で、受動的な仕方で生まれるという性格を見逃してはいけないと主張するのである。

➤ **異論 3 とその異論解答**

情念は『或る運動』であり、愛は運動の始原に過ぎないから情念ではないというダマスケヌスの異論が述べられている。これに対しトマスは、「運動は能動的である」という彼の前提自体を否定することによって解答している。情念は『或る運動』であること自体は認めているが、愛は受動的に発生するものであり、運動は必ずしも能動的とは限らないのである。

⁵ 本部分では顕著であったが、トマスに用いられる異論は、その全てがそれなりに権威のあるものであり、説得力もある。そしてトマスは、その意見を真っ向から否定するのではなく、ある程度は認めていることも多いため、原文解釈の際には、トマスがどこまで認めていてどの点を否定しているのかを見極める必要がある。

第二十七問題：愛の因について

【第一項：善は愛の唯一の因であるか】

第二十六問題では愛がそもそも何であるかを考察したが、第二十七問題では愛の原因を考える。第二十八問題では愛の結果について論じられている。

➤ 主文

「力」と聞けば我々は、能動的に何かに働きかけるものを想像しがちであるが、愛は『受動的な力なので』ある。どっかの風景を見て「綺麗だなー！！」とか思うのも運動だけど、これって受動的でしょ、みたいなノリ。そして、望ましいもの(A)は自分にとって相性の良いものである。そして善も、『自分にとって相性が良く均整が取れた』ものである。以上からして、愛の固有の原因は善である。

--そもそも善とは--

トマスによれば、善には以下の三種類が存在する；

- (1)道徳的善…倫理的に善い
- (2)快楽的善…喜びを与えるから善い
- (3)有用的善…役に立つ(価値がある)から善い

➤ 異論1とその異論解答

『詩篇』に書いてあるように⁶、「不公正」のような悪を愛する人もいるのだから、愛の原因は必ずしも善ではないのではないか！という異論。これに対しトマスは、次のように答える。悪が愛されるのは、sub ratione boni[善の観点において]でしかない。つまり、悪を愛する人も、それが悪であるがゆえに愛しているのではない。例えば一般的に悪とされる「不公平」であっても、「快楽的善」や「有用的善」の形で、その人にとって何かしら善なのである。

➤ 異論2とその異論解答

ここで引用される、アリストテレスの「『われわれは自分の悪をありのままに愛する人を愛する』から悪いものごとも愛の因である」という主張は、アリストテレスお得意の弁論術の話。トマスはこれに対し、その場合の愛の因は悪を「語る」ことであって「悪」そのものではないと反論している。

『修辞学』といわれれば、言葉をいかに巧みに書くかという学問であると思われがちだが、実際には語る事が主眼に置かれていた。トマスはこの感情論の中で、弁論術の話をもっと多く取り上げている⁷。アリストテレス曰く「弁論術を学ぶことは、あるテーマに関して、賛成と

⁶ 『詩篇』は新約聖書の一部である。よって、キリスト教徒であるトマスがその内容自体を否定することはない。

⁷ そもそも、神学大全の叙述形式自体、古代ギリシア以来の弁論を引き継いだものとなっている。

反対のどちらの立場にたっても相手を打ち負かす技術を身につけるものである」のであり、逆の立場に立つことは見えていなかった自分の意見の脆弱さや盲点をあらわにする。その上で自分本来の主張をするとき、その主張はよりバランスが取れたものとなるのである。

--善とは！--

先の3分類が納得いかない受講者も多かったようで、様々な議論が行われたのでQ&A形式で書いてみました。

Q1. 道徳的善とは何かがいまいちわからないんですけどー。

A1. 道徳的善と、快楽的善・有用的善の違いは、前者だけは常に守られなければならないという点にある。例えば、人妻に対する欲求(これは先生が自ら出した例であって僕発信ではない)は、勉強への欲求や食べ物への欲求など別のところでも満たされうるものであるのに対し、道徳的善(万引きをしない、とか)はいかなる時もすべて守られなければならないのである。

Q2. 異論解答2からすると、「あいつを殺してやる」がある人によって善と受け止められる「有用的善」であるならば、一般的に悪いことも全部「善」になりうるのですか？

A2. そういうこと。ただ一つ注意しなければならないのは、善には「真の善」と「見かけの善」の二種類があるということ。善い行為と悪い行為があった時、前者は善を目指していて後者は悪を目指しているという相違があるのではない。人間は何をするにしても「善」を目指してしまう。はたから見てもものすごい悪行だったとしても、その行為が行為者にとっては何かしら有用的か快楽的だったのであり、「善」なのである。悪い行為の、悪い行為たる所以は、より小さな善を手に入れるために大きな善を捨ててしまうことである。10000円を手に入れるために人殺しをするのはまさに、小さな善のために大きな善を捨てることであり、それこそが「見せかけの善」なのである。しかしながら再度確認すべきことは、「見せかけの善」であっても善には変わらないということである。

Q3. 善だから欲求されるのか、欲求されるから善なのか…循環しちゃってよくわかりません。。

A3. ダガマー⁸の解釈学的循環を参考にする。彼は「全体の理解は部分の理解に依存し、部分の理解は全体の理解に依存する」ということを指摘し、全体理解と部分理解が循環に陥ることを問題にした(映画を考えるとわかりやすいかも)のである。確かに善に関する議論は循環に陥るが、哲学はそもそも根源的な事柄を捉えようとする学問であって、根源的なものは説明しようがない。循環させながら、理解していくことが大事です。(ごめんここよくわからない、てか絶対でない)

⁸ ハンス＝ゲオルク＝ダガマー。20世紀のドイツ哲学者。

【第二項：認識は愛の因であるか】

➤ 主文

認識していないもの、つまり知らないものを愛することはできないため、認識は愛の原因である。第一項では「善でなければ愛されない」、第二項では「認識されなければ愛されない」と主張された。よって、「知られた善のみが愛される」と結論づけることができる。

➤ 異論 1 とその異論解答

「知識のように、知られていないものにも求められるものは存在する。愛があるから求められるのであるから、知らないことも愛の原因ではないか。」という異論に対しトマスは、「漠然とした仕方でものを元々知っているがために求められるのであって、完全に無知であるわけではない⁹。しかしそれは所有とは言えないがために、求められるのだ」と反論する。

【第四項：何か愛とは別の情念が愛の因であるか】

➤ 主文

愛という感情は、様々な感情の一つなのではなく、それらの出発点であるというのは、この以前にもなされた主張。全ての情念は、「合い性の良さ」、つまり適格さから発しているのであって、「合い性の良さ」は愛そのものなのである。ゆえに、愛とは別の情念が、普遍的な仕方であって愛の原因出ることにはありえない。(主文末尾でトマスは、普遍的でなければ別の情念も愛の原因になりうると、譲歩する形で述べてもいる)

➤ 異論 1 とその異論解答

「我々が或るひとびとを愛するのは彼らがわれわれにとって快いからである」、つまりその快=喜びも愛の原因なのであるから、別の情念も愛の原因となると異論されている。しかし、その喜びですらも別の愛から生起しているものであるとトマスは主張する。例えば、あなたがY君と一緒にいることによって喜びを覚えていたとする。もしその喜びの原因が、二人ともサッカーが好きでその話をするのが楽しいからだとする、喜びの原因は、二人の「サッカーへの愛」なのである理、結局愛が起点に来ることになる。一見無限ループのようであるが、何かを気に入らなければ喜びが生まれることはないため、最初に来るのは必ず愛である。

⁹ 「知っていることは探求されない。知らないことは探求されない。よって、いずれも探求されない」という詭弁にも、トマスの異論解答は有効。

第二十八問題：愛の果について

【第一項：合一は愛の果であるか】

unio[合一]とは、何かと何かの一致のことを指す。

➤ 主文

愛する主体と愛される対象が果たす合一には、以下の二通りある；

(1)実在的な合一。愛が働きをなすことによって、心が善に到達する状態のこと。愛されるもの(望ましいもの=善=A)と愛しているもの(心=B)に一致しているのである。したがって、合一は愛の結果である。

(2)情感の(心における)合一。これは、「形相的な仕方での合一」である(後に説明)。ここでいう合一は愛による何かと何かの一致ではなく、愛自体を指している。AがB(心)の中に住んでしまうという意味で、愛そのものが合一なのである。

この説明を聞くと、前者の方が重要で後者はさほど重要ではないと考えるかもしれない。例えば実在的な合一を「好きな人に告白してOKをもらう」という例で説明すると、心における合一は「片思い」にも留まるからである。しかし、トマスはむしろ後者の合一が極めて重要であると主張する。実在的な合一を、KさんとY君の恋愛関係であるとする。しかしその合一は、Y君がKさんへの愛を持ち続けているからこそである。つまり、実在的な合一は心の中での合一があってこそ意味を持つのである。

--“形相的”とは--

愛を果とする情感の合一は“形相的”であると、トマスは述べている。それは何を意味するのだろうか。

“形相”とは、古代ギリシアにおけるアリストテレスの“質料形相論”において作り出された哲学の基本概念である。世の中のすべてのものは“質料”=材料と、“形相”=形の二つでのみ構成されているという。机を例にとると、woodという質料に、deskという形相が与えられることによって机として存在することができる。明らかに軽装の方が本質的であり、形相は「そのものをそのものたらしめている原理」のことなのである。

➤ 異論解答 2¹⁰

同一が愛に関わる仕方には以下の二通りある(原文では三通りと言われているが、二通りだと思われる)；

(1)愛の因である合一。B(心)がそれ自身を愛している、つまり自己愛の状態にある時、それは

¹⁰ 異論解答ではしばしば、主文で話されなかった新たな主張がなされる。この異論解答2はその最たる例であり、異論2自体は授業で扱ってはいない。

愛の原因である合一である。その B の世界に A がフィットするからこそ、愛が生まれるのである。ここでいう”自己愛”は、自分が自分以外のもの＝外界との関係を結ぶ以前の段階での話である。我々が考えるような(ナルシスト的な?)自己愛ではなく、すべての人間が本能的に保持している「自らを保とうとする気持ち」である。ハエが飛んできたら避けてしまうような、物が落ちてきたら避けてしまうような、自らのあり方を維持しようとする心の持ち方をここでは”自己愛”と呼称するのであり、これがなければ愛が発生し得ないことは言うまでもない。ゆえにこの”自己愛”は「愛の因」なのであり、特に基礎的なのである。結局自己愛って何と何の合一なのと教員に聞いたら「あえて言うなら自分と自分の合一だよ」などとおっしゃっていたけどまるで意味がわからないので、あまり合一に固執して理解しない方が良いと思います。気になる人は、授業ではスキップした類似性に関する項を読んでも良いと思います。

(2) 情感の合一¹¹。トマスは、実在的合一以前に情感の合一を得られた時点で喜びが得られると(別著で)述べている。例えば、入学直後のクラス分けで、まだ話したこともないけれどもなんとなくこの人いいな、と思った時の喜びは、実在的な合一ではなく情感の合一である。

¹¹ 主文における(2)と同一。

第二十九問題：憎しみについて

憎しみという感情についての問いであるが、それは愛という感情あつてのものである。二つの感情は互いに平等なものではなく、愛に関する理解なくして憎しみを理解することはできない。

【第一項：憎しみの因と対象は悪であるか】

➤ 主文

これまでの記述における「好感」が consonantia[共鳴]”と”言い換えられている。「把捉」とは、認識する、捉える、ということの意味する重要語句。

愛という感情が、convenientia[適合]のうちにあることは愛に関する問いで述べられた通りである。（「適合的なものを把捉する」のではなく）「適合的であると把捉する」ものに向かつて欲求が持つ”共鳴”が愛なのである。とすると憎しみという感情は、有害と把捉されるものに対する欲求の”不共鳴”である。そして適合は善を意味するのであり、憎しみの在る不適合は悪の性格を持つので在るから、悪は憎しみの対象である。

【第二項：憎しみは愛から原因されるか】

➤ 反対異論

「憎しみは愛から原因される」とアウグスティヌス先輩も言っています。

➤ 主文

第1項で述べられた通り、憎しみは一種の不共鳴である。愛が共鳴なのであるから、憎しみを捉えるには愛という感情、ひいては”適合”の考察が不可欠であり、愛は憎しみに先立つということができるのである。Bが好感を持ったAを手に入れようと欲望しているところに、Cの存在がそれを妨害す流、もしくはAを破壊する限りにおいて、CはBにとって憎しみの対象となる。注意すべきは、愛の対象と憎しみの対象は別であるということである。Cに対する憎しみは、Aに対する愛から引き起こされている。愛があつて初めて憎しみが生まれると言えるが、その逆は偽である。

【第三項：憎しみは愛より強力であるか】

➤ 反対異論

「悪がはたらくのも、善の力による外はない」というのはつまり、「悪は”privatio boni[善の欠如]”である」ということである。例えば、健康という善が欠如している状態が不健康という悪である。病気という悪は、健康体という善を、部分的に蝕むことによって成立している。善が存在していなければ悪も存在し得ないのであり、悪が完全に支配した時、つまり病気が身体中にはびこりその人が死亡してしまった時、(死体は病気であるとは言えないため)悪はもはや存在していないのである。以上まとめると、善はそれ単独で善として存在するが、悪を説明す

る際にはそれが悪たる所以に触れなくてはならず、つまりどのような善に欠如しているのかを考察する必要があるという点で、善は悪に先立つものであり強力なのである。

--ディオニシウス--

今回の反対異論でも引用されていたが、この”ディオニシウス”という人物の意見は『神学大全』で非常によく援用される。いったいどのような人物なのであろうか。

ディオニシウスという人物は、イエスの死後の使徒たちの活動を記した『使徒言行録』に登場する人物である。『使徒言行録』の記述によると、同著の主人公であるパウロが、伝道旅行の道程で立ち寄ったアテナイにてキリスト教の教えを説いたところ、聴衆たちはその内容を嘲笑い、軽くあしらった(死者の蘇りなどの非現実的な内容が荒唐無稽に受け止められたためであろう)場面がある。しかし聴衆の一部はパウロの説教を信じ従うものがあり、その一人がディオニシウスだったのである。新約聖書の著者であるパウロの直弟子であるディオニシウスの著作には非常な権威があり、それらの一連の著作は『ディオニシウス文書』と呼ばれている。トマスの時代を含めルネサンスの頃までは、非常に高い権威を保ち、自らの主張を補強するために度々引用されていた。

しかし、研究が進むにつれ『ディオニシウス文書』が本人の著作ではないことが判明した。よってその著者は”偽ディオニシウス=アレオパギタ”と呼ばれるようになった。代表的な著作としては、『天上位階論』『協会位階論』が挙げられる。ヒエラルキア[位階]は、偽ディオニシウス=アレオパギタが編み出した言葉である。

➤ 主文

第二項で述べられたように、憎しみが愛に先立つことはなく、愛の果である。結果が原因よりも強力であることは不可能なのであり、「端的に語るなら(=特別な条件をつけないのであれば)」憎しみが愛より強力であることは不可能である。

ただし、憎しみが愛よりも強力であると考えられる特別な場合も存在する。その訳は、以下の二つである；

(1)憎しみが愛よりも感じられやすいため

(2)憎しみが、それに対応している愛と比較されないため

前者は、愛があるということが習慣となってしまうがためにそれが欠乏していない限りその存在が強く意識されることはないという主張によって裏付けられている。後者は少し分かりづらいが、大きな憎しみにはそれに対応する大きな愛があるにもかかわらず、対応関係にならぬより小さな愛と比較された時「憎しみが愛よりも強力だ」と主張されてしまうということを記しているに過ぎない。

ここで疑問に思う人も多いかもしれない。「(1)憎しみが愛よりも感じられやすいから」に関

して、感じられることによってしか存在しない感情においては、より強く感じられる憎しみの方が強力なのではないかという主張は、しばしばなされるものである。しかし、感情は、心が動か「される」ということに力点を置いて語られる。表面上でその人がそれを強くは感じていなかったとしても、それは心の最も深いところでその人を動かしていることかもしれないのである。Bに強力な憎しみを抱いていた時、それはそもそも心の奥深くでAに強気愛を抱いているがそれが普通になってしまっているがために感じられにくいに過ぎないのであり、実際にはその人の生活の前提となるような仕方で愛は強力に働いているのである。

第三十八問題：OF THE REMEDIES OF SORROW OR PAIN¹²

【第二項：痛苦あるいは悲しみは泣くことによって和らげられるか】

古代末期には現代違い、哲学は生きる技法として捉えられていた。困難に満ちた人生をどのようにして生き抜くことができるかを考えることが、哲学の意義であった。20世紀のフランス人哲学者ピエール＝アドはその代表格である。この部分には、まさに生きることの技法を説いた部分である。

➤ 反対異論

アウグスティヌス『告白』(プリント8)を援用し、悲しみはなくことによって和らげられると主張されている。

『告白』では、アウグスティヌスがキリスト教に改宗した経緯を自ら記したものである。プリントに掲載されている第4章は、19歳の頃の出来事について語られている。非常に仲の良い友人ができたが、その友人が熱病にかかり突然死した時の悲しみが記されている。

➤ 主文

涙と嘆きが悲しみを和らげるのは、以下の二点から説明されている；

(1)部屋に籠って一人で悲しんでいては、心はどんどん内向して悲しみは深まっていくが、泣いたり友人に相談したりして心を外に向けることによって悲しみが癒されることは我々の多くが経験上知っていることである。

(2)人間にとって、その時の心の状態(感情)にふさわしい、適合した働きが常に快適である。喜んでいる人によっては「笑う」という行為がまさにふさわしいものであがた目に笑うことで喜びはより増幅される。同様に、悲しんでいる状態には「泣く」という行為が適合するのであり、泣くことによる快適さが悲しみを中和させるのである。

【第三項：痛苦と悲しみは友人の同情によって和らげられるか】

➤ 主文

悲しい時に痛苦を共にしてくれる友人が慰めとなるのは当然である。なぜなら；

(1)悲しみは心の重圧であるが、友人が共に悲しめば一人の重圧は小さくなるから

(2)(こちらの方が重要)友人が共に悲しんでくれることで、その友人が自分のことを愛してくれていることを改めて実感する。愛されることは喜びを生むのであり、その喜びによって悲しみは弱まる。

¹² 悲しみという感情については重点的に説明されている。悲しみそのもの、原因、結果の三問題に加えてその治療法に1問が設定されており、つまり憎しみの4倍の分量が割かれている。

➤ **異論 2 とその異論解答**

人を心配させてしまったということが新たな痛苦となることで、初めは固有の悪について苦しんでいたものに新たな痛苦の原因を加えることとなるため、痛苦が2倍になってしまうという異論がなされる。これに対してトマスは、友人が痛苦を共にしてくれることは確かに新たな痛苦の原因となりうるが、友人がそのようにしてくれる原因は愛に他ならず、それによってより快適にさせる。

(ここの異論と異論解答はどちらが正しくどちらが間違っているともいいがたい)

第二十五問題：OF THE ORDER OF THE PASSIONS TO ONE ANOTHER

情念相互の序列についての ord[秩序]を論じる問題。ここの感情の分析では見えない感情の全体像を見せてくれる。

【第一項：怒情¹³の諸情念は欲情¹⁴の諸情念より先であるか、それとも、その逆であるか】

➤ 反対異論

欲望の諸情念は、「条件のつかない善に関わる」のに対し、気概の諸情念は「険しい」、つまり対象が困難であるという条件付きの善に関わるものである。したがって、欲望の諸情念の方が気概の諸情念よりも先である。

--感情の区別--

本問題では感情同士の関係性が論じられているが、感情を区別する基準は以下の二つである；

(1)時間軸

(2)対象の善悪

例えば、愛・欲望・喜びは時間軸に沿って区別されている(第二十六問題参照)。一方、愛⇔憎しみ、要望⇔忌避、喜び⇔悲しみは、対象の善悪によって区別されている。ゆえに；

- ・困難な未来の悪に抱く感情＝”気概”。接近すれば”希望”となり、離れてしまえば”絶望”となる
- ・困難な現在の悪に抱く感情＝”怒り”
- ・困難な現在の善…現在において善があるということは困難が克服されたということであるため、存在しない

➤ 主文

欲情の情念には、「運動に属するもの」(例えば欲望)と「静止に属するもの」(例えば喜び、悲しみ)が双方含まれる。その一方で、怒情の情念(例えば希望)には、「静止に属するもの」は含まれない。怒情＝気概とは、”困難な未来の悪に抱く感情”であり運動を含むが、”静止”とは「運動の目的・終極」であるためである。つまり、ここでは「運動に属する」欲情の情念・「静止に属する」欲情の情念・怒情の情念の三つに分類されて論じられているのである。

では、その3つの順序はどうなるのであろうか。まず、怒情の情念が「静止に属する」欲情の情念に先立つことは明らかである。希望が先行し喜びに終着すること、恐れが先行して悲しみに終着することから、それは理解できる。さらに、「運動に属する」欲情の情念が怒情の情念に先立つこともまた明らかである。「怒情の能力の対象が欲情の能力の対象に『険しさ』ないし『難しさ』を加えている」と書いてあることからそれは理解できる。したがって怒情の諸

¹³ 気概。困難を乗り越えようとする強い気性のこと。

¹⁴ 欲望。

情念は、「運動に属する」欲情の情念と「静止に属する」欲情の情念の中間に位置すると結論づけられる。

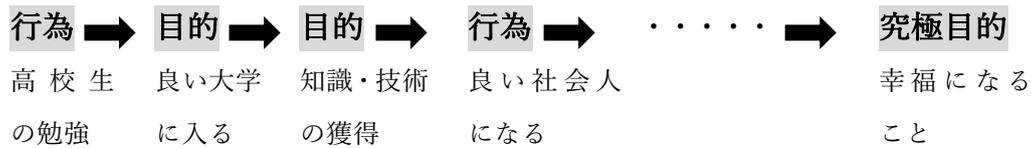
例を挙げるならば、A に対する”欲望”(「運動に属する」欲情の情念)があるとすると、そこに何かしらの困難さが現れることによってそれは”希望”(怒情の情念)となる。困難を乗り越え A に到達すると、感情は”喜び”(「静止に属する」欲情の情念)となるのである。

【第二項：愛は欲情の情念のうちで最初のものか】

➤ 主文

欲情の能力の対象は善と悪であるが、悪は *privatio boni*[善の欠如]であるために、善が悪に先行することは既に述べた。ゆえに、善を対象とする情念は全て、悪を対象とする情念に先立つこともまた明らかである。

さて、善は目的という性質を持っているが、その順序は、「意図においては先であるが、達成においては後である」¹⁵。



人間の行為には常に目的がある。その目的にはさらなる目的があり…という形で連なっている、最終的には「幸福になる」という究極目的に行き着くものである。しかしこの矢印を逆に遡ると、右側の目的があるからこそ左側の目的に意義が感じられるとも言え、この意味でふた通りの順序があるのである。

¹⁵ これはトマス独自の概念であり、アリストテレスにはほとんど見られない。

第六十四問題：(A) BY DEEDS OF MURDER¹⁶

【第五項：人は自分を殺すことが許されるか】

➤ 主文

自然は以下の3つの理由で赦されない。

(1)自然に反するから。自然本性的に、人間は自らの存在を保全しようとするのであり、自殺はそうした自然なあり方に反するものである。

(2)社会に反するから。人間は常に共同体の一部であるから、その中で各々がそれぞれの役割を果たさねばならない。自殺すれば、共同体全体に迷惑がかかるでしょみたいな。

(3)神に反するから。命は神が創ったもの。

本項でトマスは、自殺という特殊な問題について論じているが、自然・社会・神の三つはトマスの倫理学全体を貫いている軸である。自然、いうなれば自分自身との関係、社会との関係、神との関係。自殺の文脈になくとも、この三つの関係を適切な仕方で構築することが、トマスの人間論(倫理学)の基本的な枠組みである。

➤ 異論1とその異論解答

人が不正を為せるのは他者に対してのみであり、事故に対して罪を犯すことはそもそもできない。

→自殺は、愛徳に反する点で、つまり自己との関係において罪なのである。愛徳とは、信仰・希望・愛の3つのうちの愛を指す。

➤ 異論2とその異論解答

公的権力を有するものは罪人を処すことができるため、彼らは自殺してもOK。

→公的権力の保有者は他人をさばけるから殺しても良いのであって、別に自分を裁くことはできないし、よって自信を殺すことも赦されない。

➤ 異論3とその異論解答

死ぬことによってより大きな悪を避けられる場合は、死んだ方が良い。

→現生において生命を与えられている限りにおいて自由意志を行使するのはよいが、与えられている生命そのものを処分する自由はない。

¹⁶ 本問題では正当防衛や自殺も論じられており、現代の法学においても(特に哲学的な議論の際に)援用される有名な部分。トマスは、法哲学や政治哲学においても歴史上最も偉大な人物の一人なのである。

第五十九問題：倫理徳と情念の関係について

--徳とは--

「徳」は古代ギリシアで作られた(アリストテレス以来の)概念である。代表的なものは、「枢要徳」とされる正義¹⁷・勇気¹⁸・賢明(賢慮)・節制に、「対神徳」とされる信仰・希望・愛を合わせた7つに数えられる。合わせて7つが徳の代表的なものとされる。神に対する徳である対神徳と対比される枢要徳は、他のあらゆる徳を基礎づける、特に人間的な徳であることからして「倫理徳」とも呼ばれる。

virtus[徳]や aretē[力量(卓越性)]とは、「あるものの力を内側から強めていくもの」「あるものがその優れた力を発揮できる状態にあること」である。故にその対象は人間に限らず、物や動物にも当てはめられる。例えばナイフの aretēは鋭く切れることであり、馬の aretēは速く走れることである。その意味で、人間における aretēは、枢要徳と呼ばれる4つの力を指すのである。また、徳のある人は、徳に関わる事柄を①容易に②素早く③喜びを感じながら、行えるという性質を持つ(それができるからこそ徳があると言えるのである)。

--prudential[賢慮]とは--

枢要徳の一つに数えられる prudential[賢慮]とは、(狭義に「頭が良い」ということではなく)「実践的な判断力」を意味する。では、なぜ判断力が人間の主要な徳なのであろうか。それを理解するにあたっては、古代ギリシアにおける学問の分類を参考にするのが良い。

万学の祖アリストテレスは、数学や自然学¹⁹、形而上学²⁰などが含まれる「理論的学」と倫理学や政治学などが含まれる「実践的学」の二つに分類することで学問を体系化した。この二つの分類には以下の二つの違いが認められる；

(1)目的の違い。理論的学は、必然的な事柄を扱い、また知ること自体が目的(喜び)である。一方で、実践的学は知ったことを活用して実際によく生きることが目的である。

(2)扱う事柄が必然的か否か。理論的学は必然的な事柄を扱う。例えば数学において、1+1の解答がいつどこで誰が解いても2である。一方で実践的学は、「大抵の場合そうである」事柄を扱う。例えば『ニコマコス倫理学』の中でアリストテレスが「富を持つがゆえに身を滅ぼしたものがい

¹⁷ 自分のことだけでなく、他者や共同体全体のことを慮ることができる力。

¹⁸ 困難に立ち向かう力。賢明と節制については後に詳述。

¹⁹ 現代でいう物理学。

²⁰ 哲学の主要分野。アリストテレスの言葉を借りれば「存在するものが存在するものである限りにおいて何であるのかを探求する学問」である。例えば動物学は、この世界全体を問題にするわけではなく、存在するものが動物である限りにおいて何であるのかを探求する学問であり、ほとんどの学問はそうである。一方、形而上学は存在するものすべてについて扱う、つまり存在することとはそもそもどうということかを問う学問なのである。

る」と述べたように、金は基本的に良いものであるが時には悪い結果をもたらすものである。このように比較的緩い仕方では物事を捉えるのが、実践的学である。

実践的学の文脈において、その時にそこでどのように物事を判断するか、瞬時に的確な判断ができるかが重要となる。それこそが賢慮であり、よく生きることができるとどうにかに直結するのである。

--節制とは--

アリストテレスは節制の概念を説明する際、以下の四種類の人を設定²¹し、論を展開している；

- (1) 節制ある人：節制ある行いをするに喜びを感じる人のこと。この人には歪んだ欲望自体がそもそも存在せず、整えられた欲望のみが存在する。秩序ある食生活をするに喜びを感じる。
- (2) 抑制ある人：歪んだ欲望を抑えられる人のこと。欲望を叶えたいが抑えなければならないという葛藤を経て、欲望を理性で抑制できる人のことを指す。
- (3) 抑制ない人²²：歪んだ欲望を抑えることができない人のこと。欲望を叶えたいが抑えなければならないという葛藤を経て、欲望に流されてしまう人を指す。
- (4) 放埒な人：歪んだ欲望を追及することに喜びを感じる人。抑制ある人は、欲望に負けたことを後悔するのに対し、放埒な人はその欲望をかなえたことに満足する。

節制ある人	「正しい理性」がある	「整えられた欲望」がある
抑制ある人		「無秩序な欲望」がある
抑制ない人		
放埒な人	「正しい理性」がない	

【第一項：倫理徳は情念であるか】

➤ 反対異論

情念と徳は、持続性の有無という点で異なる。アリストテレスによれば、徳とは「習慣」で

²¹ ニコマコス倫理学第7巻

²² 一方でプラトンやソクラテスは「抑制ない人」は存在しないと主張した。彼らによれば、「徳」とは「知」であり、秩序ある行動をとることができないのは欲望に流されているからではなく、何が秩序ある行動かを知らないからにすぎないのである。

ある。その中で良い習慣が徳であり、悪い習慣が悪徳となる。習慣は持続的なものであるのに対し、感情は、(愛に代表されるように)外界の出来事に対して受動的に抱かれる一時的なものである。

例えば、「今日だけ!」と言って夜中に甘いものを食べてしまえば、翌日の夜中に甘いものを食べるのはより容易になるが、今日我慢すれば翌日我慢するのはより容易になる。一度の選択が後々にまで大きな影響を及ぼし、それがいずれは習慣になり、それによって身につく徳が節制である。その意味で、徳は、その人をその人たらしめる仕方で持続的にあるものであるとすることができる。

➤ 主文

徳と感情の違いは、以下の三点である;

(1)持続性の有無(上記)。感情は何らかの運動(生まれたり終わったりする一時的な動き)である。一方で徳は、運動の根源である。例えば節制という徳を持っていれば、それに基づいた「整えられた欲望」(つまり運動)が生まれてきやすくなるのである。

(2)善悪の側面を持つか否か。感情は、それ自体に善や悪の性質を持つものではなく、一概に良し悪しが定まっているわけではない。例えば同じ愛という感情であっても、それが何に対するどのような愛なのかを個別具体的に考えなければその善悪を判別することはできないのである。その一方で、本文において「徳はただ善へのみ関係づけられる」とあるように、徳はそれ自体が善であって悪い徳というものは存在し得ない。定義上、「悪い徳」は徳とは言えないのである。

トマスは、徳はその本性上悪用され得ないことを「技術」との比較で説明する。技術を身につけることは、その技術に関わることを、容易に素早く喜びを持ってできるようになるということであり、その点で技術と徳は同じ性質²³を持つ。しかしながら、技術は、悪用することが可能である。例えば、人に物事を教える技術が長けている人が、その技術を持って人に嘘や悪い事柄を教え信じこませることも可能である。一方で徳は悪用できず、そもそも悪用しようとする人には徳が身についていないのである。

(3)理性との関係性。感情は、それ自身がまず揺れ動くことで理性に影響を与えるものである。一方で徳は、それに先行する理性の働きに基づいて物事をコントロールしようとするものであり、順序が逆である。

²³ 徳の3性質については P23 を参照。

【第二項：倫理徳は情念と共存しうるか】

➤ 主文

徳と情念は共存しうるものである。しかし、ペリパトス派²⁴がそう主張したのに対しストア派²⁵は「有徳な者のうちに靈魂の情念はあり得ない」と主張し、見解の不一致があった。本文は、この不一致を紐解き解消する形で論が進められている。

両者の見解不一致は、「情念」という言葉に与えた定義の違いに起因するものであり、根本的な意見の相違があるわけではない。ストア派は「理性と両立しないところの情動は全て情念」と定義した。したがって理性を重んじるストア派にとって、感情は定義上悪いものである。その一方、ペリパトス派は情念を「知的な欲求能力」と「感覚的な欲求能力」に区別したのであり、前者は理性と背反するものではない。つまり両派で見解が一致しないのは、「情念」という言葉の定義が違うからに過ぎないのである。

ストア派の立場は、感情が賢者に存在しないわけではなく突然そのような心の動きが起こり理性を揺るがすこともあるのであるが、賢者はそれらを「是認もせず、それらに同意を与えるのでもない」というものである。つまり有徳な者は、心に突然生起する感情に理性を乱されたとしても、すぐにそれをコントロール下に置いてしまうというのであり、その意味で倫理とくと感情は一致しないとするのである。一方でペリパトス派によれば、それが「感覚的な欲求能力」の運動で理性に秩序づけた者である限り(ペリパトス派による感情の定義に従った時のみこれは可能)、有徳なものに者にも感情は見出されるのである。

(末尾の引用部分)徳とは *inpassibilitas*[無感受状態]²⁶(*apatheia*[アパテイア]と同じ構造)ではないと主張されている。ストア派が成立する以前のアリストテレスの時代に、徳=*apatheia* と考える人たちがいたことを示すものとして、思想史的に面白い箇所である。「端的・無限定的な言い方」、つまり条件をつけず、感情とは常に良からぬものであるという言い方をしているのは良くなく、徳は「あるべきでない仕方で・あるべきでない時にある」といった条件付きの感情からの静止状態であるといっている。抱くべき時・程度・仕方で抱かれる感情は、倫理徳と共存するのである。

²⁴ アリストテレスが創設した古代ギリシアの哲学者グループ。アリストテレスが逍遥(散歩)しながら講義を行ったことから逍遥学派とも呼ばれ、ペリパトスは逍遥を意味する。カントもルソーも西田幾多郎も、哲学者はやたらと散歩をしたがる。

²⁵ ゼノンが前三世紀初頭に創始したヘレニズム哲学の一学派。

²⁶ *in* は否定を表す接頭辞。*passi* は *passio*[受動(感情)]。*bilitas* は状態を表す接尾辞。*pathos*[パトス(感情)]に否定を表す *a* がついた *apatheia*[アパテイア]と同構造。

第七十七問題：感覚的欲求における罪の原因について

【第四項：自己愛は全ての罪の根源であるか】

➤ 反対異論

『神の国』²⁷を著したアウグスティヌスは、歴史上初めて歴史を学問として扱った。歴史には偶然性だけでなく、「神の国²⁸と地の国²⁹の戦い」という仕方で明確な秩序が存在し、それが歴史を形作っていると述べた。地の国の根本概念である自己愛は、自分の利益に一致する限りにおいては隣人を尊重するかもしれないが、自分の利益にそぐわなくなった時に他人を平気で裏切るような人のことを指す。誰がどちらの国に属するかは本人も含め誰にもわからず、歴史の終わりである最後の審判において初めて明らかになるものである。

➤ 主文

自己愛が罪の根源であるためには、「秩序を外れた仕方」で自己を愛していることが重要である。むしろ、適切な仕方ですらを愛することは非常に重要なことである。すべての感情は愛に基づいているのであり、自分が何を愛していることこそが世界との関わりの根源である。そしてすべての愛の根源には自己愛があることから、すべての人間が抱く感情の根本には自己愛があると言える。

²⁷ 歴史哲学に関する史上初の著作。古代ギリシアにおいて、哲学者が歴史について論じることはなかった。歴史は偶然的な出来事の連鎖であって普遍性がないとアリストテレスは考えたのである。P31 に詳述。

²⁸ 自己(人間)を無にするまで神や隣人を愛する人々の集まり。キリスト教教会に象徴される。

²⁹ 神を軽侮するにいたるほどの自己愛を抱いている人々の集まり。本文のバビロンの国とは、非常に墮落したものの例え。ローマ帝国に象徴される。

第一部：神論

神学には、「神は善である」「神は全ての祖である」という形で神を肯定する肯定神学と、「神は悪ではない」「神は物体ではない」と否定する形の否定神学の二種類がある。また、persona[位格]とは、三位一体論に用いられる概念であり、本質において唯一の神が父と子と聖霊という三つの存在様式を持つことを意味する。

第二十問：神の愛について

この世界に存在する何かしら優れたもの、及びその働きは、その創造者である神のうちにより優れた仕方存在する。優れたものは神自身がそれを持っていなければそれを他に与えることも叶わないからである。

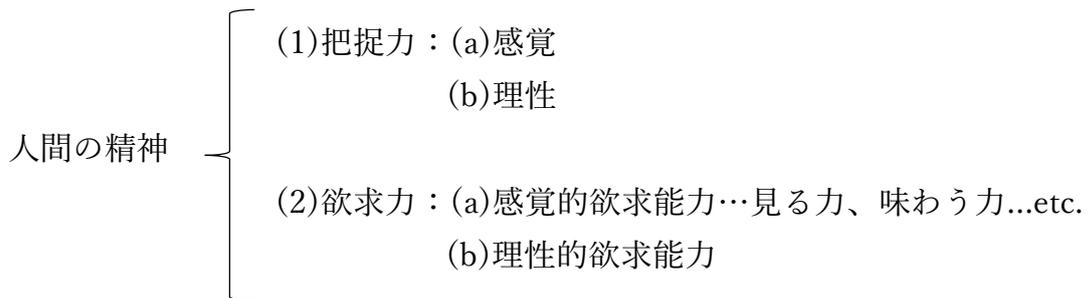
【第一項：神において愛が存在するか】

➤ 主文

意志とはそれにとって価値のあるもの、つまり前に向かって運動するのであり、これは愛である。一方で悪は、善に対立している限りにしか存在しないのであり、喜びが悲しみに、愛は憎しみに先立つのである。よって、Per aliud[他のものを通じてという仕方]で、二次的にあるものが悪である。

➤ 異論 1 と 反対異論 1

愛は感情でありすなわち受動であるが、「神においてはいかなる受動も存在しない」³⁰ため、神のうちには愛は存在しないという主張に対しトマスは、「神は受動することなしに愛する」と反論している。愛には、受動的なものとそうでないものがあるというのである。



人間は複雑な存在であるが、神は純粋に理性的である。人間は神や天使に比べ理性のあり方が弱く劣っているために、それを補うものとして他の感覚がついて世界のあり方を捉えるサポートをしている。

➤ 異論 2 と 反対異論 2

神がにおける感情のあり方は、それが受動的でないという条件付きならば人間と同じように

³⁰ キリスト教神学の根幹をなす大テーゼ。

11 種類の感情が備えているわけではではない³¹。人間の感情のあり方はその形相的面において³²不完全性を含意するが、神にそれは当てはまらない。

例えば欲望は、未来の善に関わる、つまりまだ持っていない/実現していない前に関わるということであり、ここに不完全性が認められる。神は欲しいものを即座に手に入れられるのであるから、そこに欲望は生まれえない。悲しみであれば、避けたいと思っていた悪に捕まってしまう/せっかく手に入れた善を失ってしまうという不完全性を含意している。そのようなことは、神には起こり得ない。怒りにも同じことが言える。すでに降りかかっている困難な悪に対抗しようとする心のあり方であるが、そのような不完全性は神にはあり得ない。

しかしその一方、愛すること(や喜び)に関して不完全性は認められないのである。

--神における感情のあり方は本当に人間とは異なるのか--

新約聖書を読むと、神はなかなか感情豊かに描かれている。例えば、アダムとイブが禁断の果実を口にしてしまった時、(第一項の反対異論 2 に反し)神は怒りを抱いた。聖書を根本とするはずの神学大全において、なぜ神における感情のあり方が、人間のそれよりもより単純な形であると言われているのかを、聖書解釈の視点から掘り下げる。

ギリシア哲学に代表される伝統的な神学において、新約聖書の記述は聖書のそれとは大きく逸脱していると言われる。ヘッセル³³によれば、神はより素朴な仕方でも熱情的に振る舞うという仕方でも聖書を解釈し直す必要があると説いた。それに対しトマスを代表する神学者たちは、聖書に書いてあることをそのまま素直には読まない解釈の仕方を取っている。例えば禁断の果実における神の怒りは、人間のように頭にきているわけではなく、それを「神が怒った」と人間が聖書に記したに過ぎないという。神は完全な存在であるという論理を一貫させるためには、神の中にそのような怒りが現れることはあってはならず、そのような解釈の仕方を持って初めて聖書を理性的に理解することができるようになるのである。しかしそれこそヘッセルに言わせれば「聖書から大きく逸脱してしまった」ということになる。

例えば創世記の冒頭、神が六日間で世界を作り、七日目に神が休むという記述がある。しかしながら、「一日」という概念は太陽の動きによるものであるにも関わらず神が太陽を作るのは四日目である。ここからわかるように、聖書の記述内容が論理的に筋の通ったものであるとするのであれば、ある程度の解釈が必要なのである。

³¹ 授業で言っていたのは覚えているのですがどこで言っていたかは忘れたのでここで言っちゃいます。人間の感情は 11 個に分類されます。その筆頭が、愛です。

³² 神には質料的要素は認められない。神にあるのは理性的欲求能力だけであり、感覚的欲求能力はないのである。

³³ アブラハム＝ヨシュア＝ヘッセル。20 世紀のユダヤ系思想家・哲学者。

第三部：キリスト論

【序言】

授業では扱いましたがテストには出ないと思うので解説は省略します。心配だという方は自分で読んでみてください。

第一問：受肉の適合性について

--受肉とは--

caro[肉]に由来する incarnatio[受肉]を、「神が(穢れたものである)人間の肉体を纏うこと」とするのは歴史上異端とされてきた。プラトンに代表される古代ギリシア哲学では、「ソーマ[肉]はセーマ[牢獄]」、つまり心(霊)と肉体をそれぞれ独立の実体と考えられた。良い神が精神を創り、悪い神が肉体を創ったが、精神が肉体に侵されてしまっているから解放しなければならないとするような霊肉二元論は否定されてきたのである。明治時代には、人間を肉体と精神に二分して「肉体=穢れ」「精神=神聖」と捉え、「肉体的欲望ではなく精神的高みを追求する」宗教であるという誤解とともにキリスト教は日本中に急速な勢いで広まったため、その厳格さゆえに離脱するものも多かった。しかしこれは異端の考えであり、誤解なのである。

受肉の正統な解釈は、単に「神が人間になる」ことである。「肉」とは精神と比較して穢れたものを指すのではなく、人間全体を指している。そして「肉的」とは弱く儂い人間が神に助けを求めるときも儂いままの在り方であることを指すのである。新約聖書において「肉的ではなく霊的であれ」と書かれているのは「神に従え」と言っているに過ぎない。受動しない点で弱くない存在である神が、(悲しみなどを受動的に)被ってしまう弱い存在である人間になることを「受肉」と呼ぶ。その神が受肉した存在が、イエス=キリストなのである。

--イエス=キリストとは--

「イエス=キリスト」は、固有名詞である「イエス」と「救世主」を意味する一般名詞である「キリスト(ヘブライ語では「メシア」)」の複合語。つまり、「イエス=キリスト」は、イエスはキリストであるという信仰告白である。

【第一項：神が受肉することは適当であったか】

--「適当」とは--

conveniens[適当な、ふさわしい]は、necessarium[必然的]の対義語である。数学や物理においては公式を用いて必然的な仕方で分析をすることができるが、神の行為をそのように行うことはできない。しかし、聖書に書かれていることを前提に(人間の理性を以って)考えれば、神が肉体を持つことが「ふさわしい」ということくらいはできる。つまり、それが必ず起こらなければならなかつ

たとは断言できないが、それに起因する結果からそれがふさわしいかどうかは判断できるのである。

➤ 反対異論

神は人間の目からは「見られえないもの」である。この世界が何かしらの秩序に基づいているために、この世界を作った誰かは「造られたものを通して知られ、明らかに見られる」のであるが、キリストは「見られうる」存在である。キリストを通して、神が目に見えるようになるというのである。

この反対異論は、「自然神学」³⁴を通奏低音としている。自然哲学とは、神の特別な啓示がなくとも、人間がその理性を持ってこの世界を適切に認識すれば、創造主をある程度は認識することができるはずとする神学のこと。まあただ、啓示がなくても理性で世界を理解できてこと自体が啓示によっているんで正直微妙だと思いますけどね、はい。

➤ 主文(後半部分)

善の ratio[特質(性格)]には、「最高の仕方で自己を被造物に伝えることが属する」。これは善の自己拡散性(自己伝達性)と呼ばれ、トマスはこの原理を神の受肉に応用している。例えば太陽は、自らの光や熱を独占しているのではなく、自ずと周囲にそれを分け与えている。このようにして、優れているもの(つまり善)は自ずと自らの持っているものを周囲に分け与えるあり方をしているものである。神は極めて充実した「存在そのもの」「存在が溢れているもの」であ理、善の自己伝達性によって周囲にそれらが与え多ことこそが、万物の創造である。

アウグスティヌスの「言、魂、肉の三者から一つのペルソナが成るような仕方で、被造の本性を御自身に結合する」とは、子なる神つまりキリスト(言)、魂、人間の肉体(肉)の三者から神の位格(ペルソナ)が成るということである。キリストにおいて、神と人とは非常に緊密な仕方で結合することによって、自己拡散は最大限に実現されるのであり、故に神が受肉することはふさわしかった。

➤ 異論 1

神は永遠から善の本質そのものであり、それ以上良くなりようがない。神が受動しないのもこのためである。究極的に最善のあり方をしているのであるから、少しでも変化すれば神は最善ではなくなってしまうのであり、つまり受肉という変化によって神は最善のあり方ではいられなくなるために、神の受肉は不適切であった。

➤ 異論回答 1

受肉とは、実は神が人になったことではない。自らを被造物に一致させるつまり自らが変化するのではなく、むしろ被造物の方を変化させたのである。

³⁴ 対極をなすのは「啓示哲学」である。神の啓示によって世界を認識する。

--キリスト論～キリストとは何か--

トマスはキリスト論を語る時、以下の四通りの存在を設定する；

- (1)神であり人でもある
- (2)神であるが人ではない
- (3)神ではないが人である
- (4)神でも人でもない

キリストは(1)神であり人でもある、つまり神性と人性と双方有しているというのが正統の考え方であり、神性と人性は緊密に結び付けられたのが「受肉」という出来事である。その際に、人性の方が変化したと考えたのが「異論回答1であるが、実際には、神が人になった(受肉)のは人が神になるためだったのである。神の充実したそのあり方に、人間が部分的に分け預かることが、「人が神になる」という比喩表現の本質である。キリストが神性と人性の双方を持っていることは、その二つが共存したということが、キリストだけにとどまらず我々通常の人間にも起こりうる可能性を示してくれていると、理解されるのだ。つまりヨハネ福音書冒頭で言われる「神が人になった」とは、理性的に解釈すれば「人が神性を持つことができることが示された」ということを意味するのである。

【第二項：人類の回復のために神が受肉することは必要であったか】

➤ 反対異論

授業では触れられましたが特に解説することもないので省略します。短いので自分で読んでおいてください。

➤ 主文

「必要」という概念には、2つの意味が存在する³⁵。①何か³⁵がそれなしではあり得ないという意味(例：人間の生命は食物なしにはあり得ない)。②それによって目的により適当な仕方に至りうるという意味。それがなくても可能だが、あった方がより良いよねという比較級(大阪に行くのには徒歩でも可能だが、「車や新幹線、飛行機の方がより適当」という意味で「必要」とも言える)。

第一の意味において、神が受肉することは必要でなかった。何故なら、神はその全能の力によって人間を別の手段で回復することができたからである。

第二の意味において、神が受肉することは必要であった。受肉という、より適切(conueniens)でより良い仕方³⁵で人間本性の回復が可能であったことがわかる。

³⁵ 『神学大全』において、トマスは冒頭で基本的な概念の意味をいくつかに分けて説明する語り口を多用している。これを知っておくと初見のテキストも読みやすくなるらしい。

--歴史学と神学〔トマスの視点〕--

神学は、広義には歴史学である。歴史というものは、数学とは異なり、人間の言葉が記された書物や陶器の破片など、限られた手がかりを組み合わせることでその時代に何があったかを推察するのが「より適切」なのであって、数学のように必然的な仕方で証明できることが非常に少ない。アリストテレスによると、歴史には詩と比べてはるかに学問性がない³⁶。というのも、歴史は偶発的な出来事の集まりに過ぎず普遍性に欠けるというのである(彼にとって学問とは普遍性を持つもの)。一方で詩学では、個別的な出来事や事件を分析することを通して人生や世界にとって何か普遍性を持つものを見出す営みである。その意味でアリストテレスにとって、歴史(学)、ひいては神(学)は学問とは言い難い。しかしアリストテレスの影響を強く受けたトマスも、この点に関しては意見を異にしている。神学においてはキリストという歴史上の人物の存在が決定的に重要な意味を持っているのであり、それをいかにして学問に昇華させるかということが、トマスの神学において大きな課題の一つだった。その答えが”conueniens[ふさわしさ]”であった。普遍性とは言えずとも、もう少し寛容で柔軟な次元で聖書の記述内容を捉えようとしたのがトマスの神学の特異点であるといえよう。

➤ 主文(続き:プリント 19,P16,L2~)

第二項では、神が受肉することによって人間を救済することが必要であった原因を、10個に分類して説明している。授業で講読したのは以下の三つである;

(1)信=信仰。単に目に見えない神を信仰せよと言われても、なかなか手応え

や手掛りを得ることはできない。しかしながら、神が人の姿で直接、肉声で語りかけてくれば、神の手応えは確かなものとなり、それによって信仰が抱きやすくなる。

(2)望=希望。我々が、死後も神が何か与えてくれるのではないかという形で希望を高めることは、神がどの程度我々を愛しているかという点に依る。ここで、神が人類の一員になってくれることは、それだけ人類やその幸せをよく考えてくださっているということであるから、神は人類を愛しているといえることができる。

(3)愛。(アウグスティヌスの引用を用いて)主=キリスト到来の原因として、神が人となって人類に様々な教えと模範を示してくれたということがあれば、それまで神を愛したことがなかった人間でも神を愛さざるを得ない。そこまで人間のためにしてくれる神を愛さざるを得ず、そのような形で愛が燃え上がるのである。

以上の3つ、信仰・希望・愛は「神学的徳(対神徳)」³⁷と呼ばれ、枢要徳をキリスト教で発展させたものである。

(4)正しい行為。神が人間になるということは、人間が模範とする対象としてとても良いもの

³⁶ 万学の祖と呼ばれるアリストテレスであるが、歴史学は研究していない。

³⁷ 徳の分類については P21 に詳述。

であった³⁸。

(5) 神性を与かる。神性と人生が結びつくことが可能であることが、神が人性を持つことによって示された。

(もう5つは授業扱いませんでしたが、悪を排除するという観点から語られていることを念頭に置き、自分で読んでおくようにとのことです。そういうのは自分で読んでおいてください。)

--キリスト論と感情論におけるトマスの書き方の違い--

本項の主文後半のように、様々な内容を列挙し書き連ねる書き方は、人間論の中で感情について語った時とは異なっており特徴的である。キリストの話と比べ、人間の感情は、我々やトマスにとって論理的に語りやすく、経験に基づいて納得がしやすいものである。一方キリスト、特に受肉の話は、人間の理性で確実な物言いができる度合いが感情論と比べて低い。故にトマスは、様々な視点から、様々な可能性を示すスタイルで記述しているのである。必然的にこうである！ということができずとも、蓋然性の高い解釈を様々な角度から列挙し積み重ねることで、説得力を増そうとしているのだ。

主文の末文「しかし更にそれ以外に、受肉に付随して生じた非常に多くの益があるが、それらを完全に把握することは、人間の認識能力を超える」も、感情論では言われなかったことである。徹底的に理性的に考える必要があるが、それでも人間の認識能力では神を把握することは不可能である。トマスに言わせれば、人間は神のことを *intelligere*[理解する]ことはできるが *comprehendere*[把握する(完全に理解する)]することはできないのである。その中でも精一杯理解しようというトマスの努めが、10項目の羅列の中には見て取れる。

--「主」とは--

神学大全の中でも多用される「主」とは、キリスト教の文脈においては神を指し示す。なぜ、「主」と呼ばれるのだろうか。

元来は、旧約聖書において神の名はヘブライ語で“YHWH”³⁹である。しかしながら、神の名前を呼ぶことは非常に恐れ多いことであるため⁴⁰、神の名前はユダヤ教の一部の司祭だけが知っていた。しかし時が経つにつれ、誰も神の名前がわからなくなってしまい、文字として残る母音のみが

³⁸ アウグスティヌスの引用の仕方がうまい箇所。アウグスティヌスは言語学を学んでいたためにレトリックが非常に巧みであり、トマスの無味乾燥な文章に彩り？を加えている。

³⁹ ヘブライ語は、右から左に読む言語である。また、母音が存在しないため子音を補いながら読む必要がある。YHWH というのは、音声を文字にした場合の表記にすぎない。

⁴⁰ 人の名前を呼ぶことは、相手を支配することにつながる。古代では、呪われないように、周囲に名前を知られないようにしていた程である。ヴォルデモート卿ことトム＝リドルが“You-know-who(例のあの人)”と呼ばれるのもそういうことでしょう。

残されてしまった。故に、神のことは”YHWH”の代わりに「アドナイ」⁴¹と呼ぶようになり、これは日本語で「主」を意味するのである。

⁴¹ ラテン語では「ドミヌス」。